
異説御伽噺 「長靴をはいた猫」

神田白兔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異説御伽噺 「長靴をはいた猫」

【Nコード】

N0339K

【作者名】

神田白兔

【あらすじ】

愛しい主人の為に、知恵と勇気を振りしぼり、ひたすらに尽力し続ける、けなげな一匹の猫。けれど、主人が本当に望んだものは…？異説「長靴をはいた猫」、開幕。

（待っていてくださいね、ご主人様）

猫は、主人が喜ぶ顔と、主人に褒められる自分を想像し、期待に満ち溢れながら、暗い森の恐ろしい魔法使いの元へと駆ける。

要領が悪く、いつも父親や兄たちに苛められていたが、それでも優しさを失わない人。それが、猫の主人。

猫の主人は、猫が鼠を捕れず、お腹をすかしている時はいつも、自分のご飯を削って分け与え、猫が寒さに震える夜はいつも、ベッドに招き入れ、抱いて寝てくれました。

父親が死んだ日も、一番上の兄は粉ひき小屋、二番目の兄は口バを遺言で与えたのに、主人には何も与えなかつた父の死を、一番嘆いたのは彼で、嘲りながら、「みそつかす同士お似合いだ」と言い、猫を与えた兄に、笑ってありがとうと言った人。

そして猫に、「お前がいてくれるのなら、寂しくないから嬉しいよ」と、優しく頭を撫でてくれた主人。

こんな、誰よりも優しい主人が、家族から蔑まれ、何も得られないなど、猫にとっては許されない理不尽でした。

だから、猫は決めました。この人が得るべきものは、私が与えよう。

この優しさにふさわしい、地位も、名誉も、財産も、すべてを与えよう。

猫は主人に頼んで、長靴と袋をもらいました。長靴を履き、背筋を伸ばしてピンと立つ猫は、猫とは思えぬくらい、威厳をもって見えました。

猫は主人からもらった袋に小麦を詰め、森へと向かいました。

森の中で猫は、袋は草の中に隠れるように、中身の小麦がちらり

と見えるように細工して、罾をはりました。小麦につられ、野兔が袋の入り口に入った瞬間、猫は袋の口に結ってあったひもを引っ張って、袋を閉じて野兔を捕まえます。

そうやって、獲物が袋いっぱいになると、猫はその袋を抱えて、王様のところに向かいました。

この国の王様は、野兔が好物で、そしてそれよりも珍しいものに目がありません。長靴をはいた猫が訪ねてきたと聞けば、喜んで向かい入れました。

「王様、私は私の偉大なる主人、カラバ侯爵様から献上品を持ってまいりました」

猫は丁寧にお辞儀をして、捕まえたたくさんの野兔を王様に献上しました。王様は喜んで、猫に持てるだけの金貨を与え、猫の主人にお礼をよく言ってくれと頼みました。

猫は早速、主人にもらったたくさんのお金を見せ、与えました。

主人は、初めはひどく驚きましたが、猫の知恵で王様から与えられたものだと知り、猫の頭を撫でていっぱい褒めてやりました。

その時の主人の顔は、どこか寂しげだったことに猫は、気づきませんでした。

猫は数カ月、同じようなことを繰り返して、すっかり王様のお気に入りとなりました。しかし猫の目的は、お金を得ることで、自分が王様のお気に入りになることではありません。

「ご主人様、お願いします。私を信じて、私の言うことを聞いてください」

突然そんなことを言い出した猫に、主人は困惑しましたが、必死で頼み込む猫に負けて、主人は意味もわからず、言われた通り森で水浴びをしました。

王様のお気に入りとなった猫は、今日は王様がお姫様を連れて、この湖まで散歩に来ることを知っていました。猫は、王様の馬車が通りかかったとき、前に飛び出て叫びました。

「王様！ 助けてください！ カラバ侯爵様が、盗賊に襲われ、湖に落されてしまったんです！」

猫にすっかり騙され、王様は猫の主人を助け、主人は何が起こっているのかよくわからないまま、立派な服を王様からもらいました。その服は、あつらえたように主人によく似合い、どこからどう見ても猫の主人は、立派な王子様にしか見えません。

お姫様も、主人の美しさに見惚れ、バラ色の頬で彼をうっとり見つめました。

全ては猫の計算通り。けれど何故か、主人に向けるお姫様の視線に、猫の胸はチクリと痛みました。

でも猫は、そんな痛み気にもかけませんでした。

そんなことよりも猫には、やらねばならないことがありました。

猫は主人を王様に任せ、一目散に走ります。向かった先は、とても広大で豊かな領地。恐ろしい魔法使いが支配しているという、噂の地。

猫は、野原で牧草を刈る、大勢の百姓に尋ねました。

「お前たち、魔法使いを倒して欲しくないか？」

突然現れた長靴をはいた猫に、百姓たちは驚きましたが、それ以上驚くべきことはその猫のセリフ。

「私が、お前たちを支配する魔法使いを倒してやろう。その代わりに、これからここを通る王様に、この牧草地は誰のものかと訊かれたら、カラバ侯爵様のものですと答えるんだ」

猫が恐ろしい魔法使いを倒すなんて、普通に考えれば笑い話にもならないことですが、百姓たちは皆、うなずいて了承しました。もしかしたら、この不思議な猫なら、本当に魔法使いを倒せるかもしれない、と思わせるほど、猫は自信満々で、威厳に満ち溢れていました。

百姓たちに約束させ、猫はまた走ります。そうやって猫は、麦畑の百姓や、森もきこりにも同じことを言い、同じ約束をさせました。

そして、たどり着いたのが、森の奥の豪華な城。全身の毛が逆立つほど、恐ろしい気配を放つ、魔法使いの城。

しかし猫は不敵に笑いながら、その城に足を踏み入れて言いました。

「こんにちわ、魔法使い様。ご高名な魔法使い様のお屋敷があると聞き、ぜひご挨拶申し上げたいと思い、馳せ存じました」

丁寧に猫が挨拶をすると、魔法使いも、この不思議な猫に興味を持ったのか、城の奥からしゃがれた「入れ」という声が響きました。広い城の奥へ、奥へと進む猫。恐ろしい気配は、奥へ行けばいくほど強くなり、猫の心臓は弾けそうなくらい鼓動を打ちます。

けれど、猫の歩みは止まりません。愛しい主人の喜びを思えば、恐怖など綺麗に消え失せます。

大きな扉が開き、大きな体にキラキラと輝く目が恐ろしい魔法使いと対面しても、その気持ちはピクリとも揺らぎませんでした。

「お会いできて光栄です、魔法使い様」

恭しく礼をする猫に、魔法使いは好奇の視線を浴びせ、尋ねます。「畏まるな、猫よ。それよりも、仔猫ふぜいが何用じゃ？」

「それは、ぜひとも魔法使い様にお教えていただきたいことがあります。魔法使い様は、己の望むままに姿を変えれると聞きましたが、それは本当でしょうか？」

猫がそう尋ねると、魔法使いは空気が震えるほど怒り、叫びました。

「貴様はわしの力を疑っておるのか!？」

「いいえ！ めっそもございません！ ……ただ、いくら素晴らしいお力を持つ魔法使い様であっても、たとえばライオンやゾウのような、自分の体より大きな姿に変化はできるのかと……」

「多少は知恵が回るようだが、所詮は子猫か。そんなこと、造作もないわ」

魔法使いがそういうのが早いか、ボンッと音がたち、魔法使いは

大きな一頭のゾウになり、得意げに鼻を振り上げます。

「ああ！ 申し訳ありません、魔法使い様！ 疑った私が、愚かでした！ ……魔法使い様、もしよろしければ、ドラゴンに変化というのは……」

「容易いことじゃ」

眼を輝かせ、魔法使いの傍らで膝をついて敬う猫に気を良くして、魔法使いは再び姿を変えました。

そこには、猫などいとも簡単につぶせそうな、山のように大きなドラゴンが現れ、猫はますます目を輝かせます。

「どうじゃ、わしの力が思い知ったか？」

「はい！ さすがは魔法使い様！ 素晴らしいお力です！！」

猫はさんざんドラゴンに変身した魔法使いを褒め称えましたが、ふと、不思議そうにまた、尋ねました。

「ところで魔法使い様。魔法使い様は、これとは逆にものすごく小さい生き物……たとえば鼠に変化は可能でしょうか？ 大きな生き物よりも、難しそうですが、魔法使い様なら、息をするよりも容易いことですよね！」

「あたりまえじゃ」

魔法使いは言うな否や、ポンつと音を立て、小さな鼠となり、猫の足を駆け回ります。

猫は感激の極みと言わんばかりに目を輝かせ、蕩けるような声で言いました。

「まあ、なんて愛らしく、そして……おいしそうな鼠でしょう」

魔法使いは、猫の言葉を理解する前に、パツつかまれ、ゴクンと呑み込まれてしまいました。

「魔法使い様、ごちそうさま」

「おかえりなさいませ、カラバ侯爵様。そして、いらっしやいませ、王様」

猫は恭しく、主人と王様を迎え入れました。丸呑みした魔法使い

から、奪ったばかりの城で。

「おお、猫よ。そなたの主人はこれほどまでに立派な人物だったとは。この城はもちろん、あの広大で豊かな牧草地に麦畑に森。皆すべて、カラバ侯爵のものだとは！」

王様は猫と主人を褒め称え、お姫様はますます主人に熱っぽい視線を向けます。

けれど、何故でしょう。肝心の主人はひどく困ったような、悲しげな顔をしています。

でも王様は主人の様子には気付かず、満面の笑みで語りました。

「カラバ侯爵。どうだろう？ もし、よろしければわしの娘と婚禮を挙げ、わしの婿になってくださらぬか？」

猫の望み通りの言葉が、王様から主人に与えられ、猫は期待に満ちた瞳を、主人に向けました。

主人が喜ぶ顔を、期待して。主人の「ありがとう」という言葉と、頭を撫でる手を望んで。

けれど主人は、悲しげな顔のまま言いました。

「いいえ。それは、できません。私は、カラバ侯爵ではありませんから」

「私はカラバ侯爵という名ではありません。貴族どころか、しがない粉ひき小屋のみそっかすです。」

この城も、あの森や麦畑や牧草地も、私のものではありませんし、王様に献上した野兎も、私が出たものではありません。すべて、猫が一人で知恵をしぼって得たものです。……私のものは、何一つとしてありません。

だから、申し訳ありませんが、私はお姫様と結婚はできませんし、王様の婿になどなれません」

主人は丁寧に謝罪して、着ていた立派な衣装を返し、城を後にしました。

「ご主人様！！」

わけのわからない猫は、慌てて主人の後を追います。

「何故ですか！？ 何故、あんなことを言ったのですか！？ 何故、私からの贈り物を、受け取ってくれないのですか！？」

ただひたすらに、主人の為に尽力し続けた猫が、泣きじゃくって主人にすがりついて尋ねると、主人は困ったように笑って答えました。

「言っただろ？ あれは全て、お前が得たものであって、私のものなんかじゃない。私が持つには、どれもこれも立派すぎて、大きすぎるものだ。お前の気持ちは嬉しいが、あれほどのものは、何の努力もせずにもらっていいものじゃない」

自分のしてきたことも無意味さに気付き、猫はひどいショックを受けました。そんな猫に、青年は優しく頭を撫でて続けます。

「そして、お前も私が持つには立派すぎる。お前の知恵と勇気なら、王様のお役にたてるだろう。……だから、お前は王様の元へ戻り、王様と暮らさない」

「嫌です！ いくらご主人様の言葉でも、それだけは聞けません！！」

猫は、叫びます。泣きながら、思いを主人にぶつけるように叫びました。

「ご主人様がいたから、私は知恵を、勇気を出せたのです！ ご主人様の為でなければ、私は何もできません！ ご主人様は、自分は何もしてないから、何も持つていないと言いましたが……少なくとも、ご主人様が優しくしてくれたから、私はここにいます！！ 私と、私の気持ちだけは、誰が何と言おうと、ご主人様のものなんです！！」

猫の言葉に主人は、眼を丸くしましたが、次第に優しく微笑んで猫を抱きあげてくれました。

「そうか。そうだな。ありがとう。私も、お前がいなくなったら、寂しくて耐えられないよ」

猫と主人はその後、町で小さなお店を作り、まじめに細々と暮らしました。

時々、青年は猫の力を借り、ともに苦勞を乗り越えながら、満ち足りた日々を過ごしました。

どれほどの金貨や、広大な領地、立派なお城を与えても得られなかった、猫が最も望んだ主人の笑顔とともに、ずっとずっと

(後書き)

異説御伽噺シリーズ第二弾です。

ラストを変えてみました。自分で言うのもなんですが、何もせず
名声を得る原作より、こういう終わりの方が、教育によさそう。

中盤は原作そのままの駄文ですが、最後まで読んでいただき、あり
がとうございます。

もしよろしければ、感想もよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0339k/>

異説御伽噺 「長靴をはいた猫」

2010年10月8日15時08分発行